

その四

文楽

「文楽」は浄瑠璃を語る太夫と三味線、人形が三位一体で演じられる人形劇で、歌舞伎や能・狂言と並び日本の古典芸能の一つです。国指定の重要無形文化財であると同時に、ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。世界に認められている文楽ですが、実際に劇場に足を運んだ経験のある方はあまり多くないかもしれません。今回は、文楽の基本知識と魅力についてお伝えしましょう。

文楽ってどんな芸能？

日本独自の伝統的な人形劇、それが文楽です。古くは「あやつり浄瑠璃」、あるいは「人形浄瑠璃」などと呼ばれ、「文楽」というのは人形劇を上演する大阪にあった劇場の名前でした。それがいつの間にか、現在のように人形劇そのものを指すようになったとされています。

文楽の舞台では、人形と人形を操る人形遣い、物語を語る太夫、伴奏をする三味線によってさまざまなドラマが演じられます。

太夫と三味線とで語られるドラマが「浄瑠璃」です。そのルーツは、室町時代中期ごろ（15世紀末）に、扇や鼓の拍子、琵琶などの伴奏で語られた浄瑠璃姫と牛

若丸との恋物語『浄瑠璃姫十二段草子』とされています。瑠璃姫を語る節回しが人気となり、別のさまざまな物語を語るようになって、別々「浄瑠璃節」と呼ばれるようになったそうです。そして16世紀ごろ、琉球から三線さんしんが伝来し、それを改良したとも言われる三味線が伴奏に使われるようになりました。

この浄瑠璃が大きく発展するのが江戸時代です。心中などの事件を近松門左衛門（1653～1724）が素早く舞台化した作品を竹本義太夫（1651～1714）が語り、あやつり人形で演じることで大衆の人気を得ました。三味線の演奏とともに太夫が語るストーリーを「義太夫節」と呼ぶのはこのためです。こうして始まった人形浄瑠璃が、現在まで受け継がれてきたのです。



三業——太夫と三味線、人形遣い

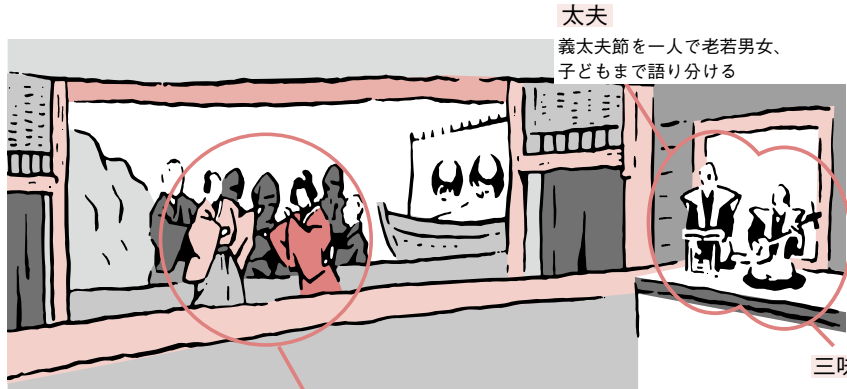
文楽では物語のストーリーを三味線の演奏に乗せ、太夫が語ります。物語の背景や、演じられる場面の情景、登場人物それぞれのセリフやそこに込められた喜怒哀楽など、三味線と呼吸を合わせ、太夫一人で語り分けます。また演目によっては複数の太夫で登場人物を語り分けることもあります。

一方、人形遣いは一人ではありません。人形を支え、首と人形の右手を操る「主遣い」、左手を操作する「左遣い」、そして足を動かす「足遣い」と、人形一体を三人の人形遣いが操るといふ世界でも例を見ないものです。人形のしぐさや、首の傾きや眉の上下、目の表情などほんのわずかな動きによって、生身の人間以上に私たちの心情に訴えかけます。

この人形は、「かしら」と呼ばれる頭部や、衣裳がばらばらに保管され、公演の都度、役に合わせて準備されます。かしらにかつら（鬘）を付けて結い上げられ、衣裳・手足・胴・小道具などが揃えられます。着付けは、人形遣いが自ら行います。

このように文楽は、太夫と三味線と人形遣いの「三業」が、びつたりと息を合わせ、

舞台全景



太夫
義太夫節を一人で老若男女、子どもまで語り分ける

三味線
登場人物はもちろん動物の鳴き声や風雨など自然の音も表現する

人形 人形一体を三人で操ることが基本ですが一人で操るものもある

物語をつむいでいくことで舞台が作られる、高度に発達した人形芸術なのです。

文楽の演目

それでは文楽が演じる物語にはどんなものがあるのかみてみましょう。

文楽では、江戸時代以前の公家や武家の社会の出来事を演じた物語を「時代物」と呼び、江戸時代の町人社会の出来事を演じた物語を「世話物」と呼びます。

時代物の代表的な演目が「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」です。歌舞伎でも同じ演目がありますが、それらは文楽で評判をとった舞台が歌舞伎でも演じられたものです。

世話物の代表としては、近松門左衛門の「曾根崎心中」や「冥土の飛脚」など、当時のお金をめぐるトラブルと絡めて男と女の物語をドラマチックに描いたものが挙げられるでしょう。

人形の三人遣い



主遣い
10kg近い人形を支え、首と右手を操る

約84cmのところ
が人形の地面である「手摺り」となる

舞台下駄
人形のサイズに合わせていろいろな高さがある

左遣い
人形の左手と小道具を担当

足遣い
人形の両足と足音を担当

さらに最近では、シェイクスピアの「テンペスト」を翻案したり、著名な劇作家が「曾根崎心中」をもとに書き下ろした新作文楽なども上演されています。

文楽を観にいこう

文楽は主に大阪にある国立文楽劇場、東京の国立劇場小劇場で定期的に公演があります。また、愛媛県の内子町にある内子座での年に一度の公演など地方公演も行われています。

さて、文楽を鑑賞する際に、太夫の語りが初心者に聞き取れるかどうかを心配する方もいらっしゃるかもしれません。そんな時は劇場で売られているパンフレットなどであらすじを確認しておくといいでしょう。国立劇場であれば舞台左右端に太夫の語りの字幕が表示されるので安心ですし、同時解説のイヤホンガイドを利用することも可能です。

初心者向けのわかりやすい解説と著名な演目とをセットにした「鑑賞教室」も開かれていますので、まずは入門をかねて鑑賞教室に足を運ぶのもオススメです。歌舞伎ファンの方なら同じ演目を見比べてみても、いろいろな発見があることでしょう。